



2019年11月11日放送

## 「風疹抗体価測定と風疹ワクチンについて」

市立福知山市民病院 総合内科医長 川島 篤志

### 止めるぞ風疹？風疹のクーポン？

2019年秋に開催されたラグビーワールドカップ、自国開催でもあり、とても盛り上がりましたね。その盛り上がりのなかで、「止めるぞ風しん」と記載されたポスターを見かけた方もおられたでしょうか？また「おじさん世代」が昔よくみた、シティハンターというアニメのポスターを街なかで懐かしくみられた方もおられるかもしれません。これらが厚生労働省が公表している風しん予防啓発のポスターだったのはご存知ですか？このラジオの視聴者やその家族、身の回りの方に風しんのクーポンが届いた人がいるかもしれません。テレビでもクーポンのことが取り上げられていましたが、これが何を意味していたのでしょうか？あなたのまわりでは風しんは話題になっていますでしょうか？

### 風しんと先天性風疹症候群

さて、風しんにかかるると何が問題なのでしょうか？風しんでは、熱や発疹、リンパ節が腫れるなどのかぜに似た症状がみられますが、一般的には自然に軽快してきます。15～30%の人は感染しても症状が出ないといわれています。と聞くと、「何だ、大したことない感染症だな？」と思われた方がおられるかもしれませんが、問題は、妊婦さんが罹った時に起こってしまう合併症とその感染の広がり方にあります。

風しんに対する抗体をもたない妊婦さんが感染すると、先天性風疹症候群と呼ばれる、眼や耳、心臓に障害をもった子供さんが産まれることがあります。その発症率は妊娠1か月で感染すると

#### 風疹とは

発熱・発疹・リンパ節腫脹を特徴とするウイルス性発疹症

**症状のない不顕性感染が15-30%あり、**

臨床症状のみで風疹と診断する事は困難

風疹に感受性のある**妊娠20週頃までの妊婦**が感染すると、

**出生児が先天性風疹症候群(CRS)を発症**する可能性↑

男女ともワクチンを受けて、まず風疹の流行を抑制し、

女性は**感染予防に必要な免疫を妊娠前に獲得**

しておくことが重要

国立感染症研究所 HPより引用 <https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/4>

50%以上が、2か月で35%、4か月でも8%とされています。

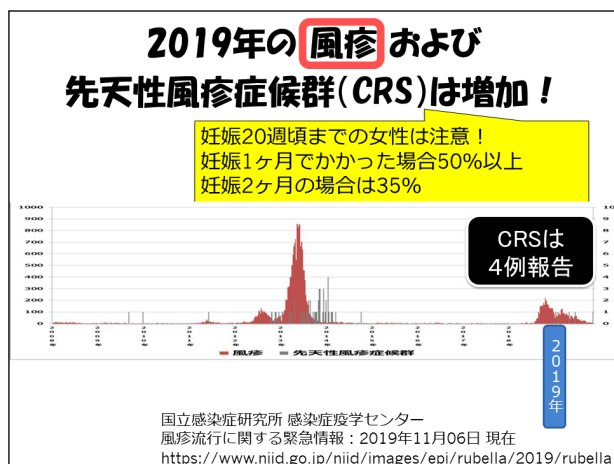
感染の広がりやすさですが、風しんは飛まつ感染で拡がり、感染力はインフルエンザより強いとされています。自分の症状が軽くて、風しんにかかっていることに気づかずに移していることがあったり、感染してから症状を呈するまでの期間、2～3週間といわれる潜伏期間でも感染を拡げる可能性があります。

このことに関しては、厚生労働省などが1分ほどの啓発動画を作成しています。漫画の「コウノドリ」でも先天性風疹症候群のことが取り上げられ、2018年冬には無料配信がされたことを覚えておられる方もおられるかもしれません。多くの方の眼に触れて欲しいです。

### 現在の流行は？

日本では6年前に風しんのアウトブレイクがありました。その後、いったん減少したのですが、2018年、そして2019年に残念ながら患者数の増加、アウトブレイクがみられています。この感染の流行の多くは特定の世代、つまり風しんに対する抗体価を獲得していない「おじさん世代」の男性ということもわかっています。

そして前述した先天性風疹症候群の子供さんは、2013年前後の流行では45人、そして2018年からの流行でも、既に3人が報告されています。とても残念なことです。



### 国が本腰(?)をいれたキッカケ?

社会全体で妊婦さんを守るべき、先天性風疹症候群をおこさせない!というメッセージは、医療従事者のあいだでは昔から言われていました。では、なぜ今になって風しんの予防啓発について、眼にする・耳にする機会が増えたのでしょうか?

実は2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に関係しています。このイベントに多くの外国人が訪日することが予想されますが、2018年秋にアメリカのCDCと呼ばれる感染症

**CDCからの勧告→日本産婦人科医会の声明**

CDC Centers for Disease Control and Prevention  
CDC 24/7 Saving Lives. Protecting People™

Travelers' Health

Home CDC Home Travel Notices

Destinations Rubella in Japan

Find a Clinic +

Travel Notices -

Rubella in Japan

Travel Advice and Resources +

Alert: Level 2, Practice Enhanced Precautions

2018年10月31日  
公益社団法人日本産婦人科医会 会長 木下 勝之  
“風疹ゼロ”プロジェクト作業部会代表 平原 史樹

風疹の流行が現在も続いております。米国CDC(アメリカ疾病管理予防センター)からは2018年10月22日付で風疹流行につき、予防接種や過去の感染歴がない妊婦の日本への渡航を控えるよう警告が出ています。

に関連する機関からから衝撃的な発表がありました。「風しんの抗体がない妊婦は日本へ渡航すべきではない」と警告が発せられたのです。

これで火がついたのかどうかは定かではありませんが、国・厚生労働省としては、風しんの撲滅に向けて、大きな舵を切ったと言えると思います。

### 厚生労働省の取組みと残念な点

取組みについてはご存知でしょうか？ これまでも妊婦さんや、配偶者向けの抗体価測定、それに続くワクチン接種の補助が各自治体で行われていました。ただ、手続きが煩雑なのと比較的厳しい条件もあって、利用者は限られていたと思います。私の自治体では、「母子手帳を持参が必須」であり、妊娠がわかってから抗体価を測定するという手順に疑問を感じていました。今回は、2019年4月から3年にわたり、定期接種で風しんワクチン接種のチャンスに恵まれなかった特定の世代の男性に対して、各自治体から「抗体価測定の無料クーポン」を送付し、各医療機関や健診で受けやすい体制をつくるというものです。抗体価が十分ではない方は更にワクチン接種も受けられます。

感染症診療や予防医療に精通している方から、「抗体価測定せず、最初からワクチンを接種した方がよい」という意見もあります。今までそのような説明で自費診療を行ってきた施設もあると思います。なぜ、抗体価測定、そしてワクチン接種補助という流れになったのか、厳密な理由はわかりませんが、予算化も含めて難題を乗り越えてきた苦渋の政策になったのだと、個人的に理解しようとしています。

#### 公費負担のワナ（申請しにくい？）

【例】

風疹抗体検査の結果 抗体価が十分ではなく  
下記のいずれかに該当される方

- 妊娠を希望する 女性
- 妊娠を希望する 女性 の **配偶者**
- 妊娠している 女性 の **配偶者**

申請しに行きますか？

もうひとつ、残念なことがあります。厚生労働省から各自治体におりた事業なのですが、業務の優先順位の問題なのか、全国一斉で啓発活動が始まる・・・ということにならなかったのです。対象世代を公表しておきながらクーポン配布は、前半世代と後半世代に分かれていて、後半世代の方には2020年度に送付となるようです。ここでも足並みが乱れると、啓発という力は分散されてしまうような気がします。自治体におりた事業なので、医療職の関与が乏しいことも懸念事項です。

ただ嘆いてもしかたがないので、今与えられている3年間の機会を大切にして、大きな前進をしたいと思います！

### 医療従事者の無関心・無力さ

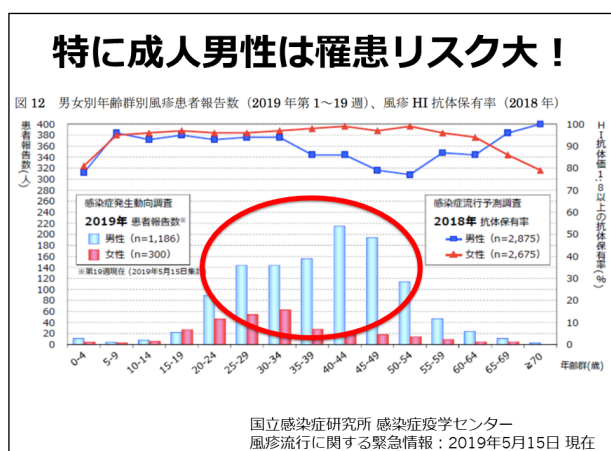
ただ、このクーポン配布から抗体価測定→ワクチン接種につながったのはまだ10数%とされています。この取組みが遅々として進んでいないのはどうしてでしょうか？

いくつか理由が考えられますが、その1つに、医師を含めた医療従事者の無関心が潜在しているのではないかと思います。医療従事者の多くは医学生も含めて抗体価測定・ワクチン接種を済ませているので、自分は大丈夫！です。日常診療と異なる予防的な観点に対して、自分事として活動する医療従事者が多くないことは想像に難くありません。

医療従事者の先導者は必ずしも医師でないといけないわけではないのですが、現実的には、軸となって動く医師がいないと施設・組織での対策は進まないのが現状かと思えます。

### 啓発用語！：「無に泣く」世代（1962～79年生まれ）を笑顔に！

「そういえばワクチンを打っていない世代があったなあ」と記憶がある医療従事者は少なくないと思いますが、その年代を正確に覚えて、日常の臨床のなかで活かしている医療従事者は多くはありません。今年度みられるポスターでも、「おじさん世代」とか「40～57歳」という言葉がありますが、「おじさん」って何歳？と思いますし、2020年度には、「41～58歳」、2021年度には「42～59歳」という表記になってますます覚えられないと思います。



私は、総合診療医として幅広い世代の診療、そしてワクチンを含めた予防医療に興味があり、公衆衛生を大学院で学んだ医師です。看護学校では感染症の授業を担当し、某有名結婚情報雑誌の引用で「結婚前に確認しておきたい3つのこと」として、先天性風疹症候群や風しんワクチンのことも伝えていました。それでも、風しん撲滅に関しては積極的に行動をしたことは恥ずかしながらありませんでした。なぜなら、対象年齢がわからない、そして、わかったとしても次に起こすアクションが患者さんの「直接のメリット」にならず、時間とお金がかかることだったからです。

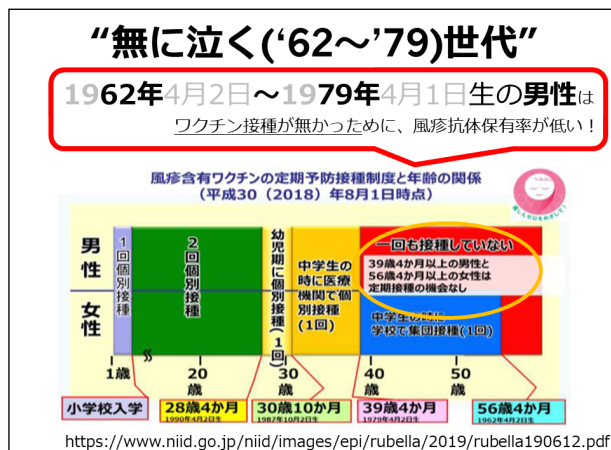
ところが、前述した厚生労働省の政策で患者負担が軽減されるという光明が差ししました。あとは覚えにくい対象年齢、つまり風しんワクチンが無く、定期接種ではなかった空白の世代の男性にどうアプローチするのか、を考えなければいけなかったのですが、この対象年齢を覚えるための啓発用語をつくられた先生がおられました。

**追加的対策のポイント**

抗体保有率↓の  
「**無に泣く**」世代（19**62**～**79**年生）男性  
を Target

- ◆ **3年間 全国 原則無料で定期接種！**
- ◆ **まずは 抗体検査を！**
- ◆ **夜間・休日に対応可能な体制整備！**

奈良のやわらぎクリニックの北和也先生が考案された啓発用語が、「無に泣く」世代」というものです。これは「ワクチンが無い」時代に「泣く泣く」ワクチンが打てないままの世代の男性が、1962年4月2日～1979年4月1日生まれの方であり、西暦との語呂合わせで「無に泣く」世代と表現しました。これなら覚えやすいし、広めやすいと思いませんか？もう一度、言います。無に泣く世代！です。



### これからの展望

ただ、日常のなかで、眼の前の方の生年月日を確認して、風しんの話につなげることが「自然に」できる職種はどれくらい思いつきますか？そして、抗体価測定対象者、風しん罹患のハイリスク者に接点がある職種はどれくらい思いつきますか？



最初の答えは医療従事者になりますね。前述したように意識の温度差があると思いますが、改めて医療従事者が頑張らないといけないと思います。そのために、啓発用語、「無に泣く」世代(1962～79年生まれ)」を利用していただければと思います。

さて、後者2つがもう一つの難関、これからの知恵の出どころだと思います。「無に泣く」世代(1962～79年生まれ)男性はそんなに医療機関を受診されません。あるとしたら・・・そう、健診です。健診のなかにもどのように風疹抗体価測定を取り込むか、企業の対応次第だと思えますし、産業医の先生への啓発も近道かもしれません。

厚生労働省も先日、事業者向けのセミナーを開催もしています。東京都や大阪市など、行政職員に対してのアクションも影響力があるかもしれません。

東京オリンピック・パラリンピックをはじめとした、マスコギャザリングのイベントに関連する人全てに意識してもらおう、とか、多くの人と交わる選挙活動でも必須化するとか

### この3年間でのアクションプランは？

- ◆ **特定学会** への働きかけ  
 日本人間ドック学会 日本産業衛生学会  
 日本総合健診医学会
- ◆ **特定職種** 結婚紹介雑誌も  
 航空関連 遊園地関連 政治家(特に選挙前...)
- ◆ **特定イベント参加者**  
 東京オリンピック・パラリンピック 大阪万博

になると、行政の方の力も借りられるかもしれませんね。また、海外からの方を含めた不特定多数の方との接点のある職業、宿泊・交通、特に空港関係やアミューズメントパークの産業医さんがアクションを起こして、それが拡まるといいですね。

現時点では、自分自身の人脈では十分なことはできていませんが、色んなアイデアが沸き起こってきて、真の意味で、「社会が妊婦さんを守る」ことができると嬉しいなと思っています。この3年間で大きなターニングポイントです。皆で頑張りましょう！

※「無に泣く」世代（1962～79年生まれ）を笑顔に！のFBページ：

<https://www.facebook.com/無に泣く世代を笑顔に-2367869003301788/>